

京都市 幼保小の架け橋プログラム手引き

概要版



幼保小の架け橋プログラムの意義

架け橋プログラムとは

※1

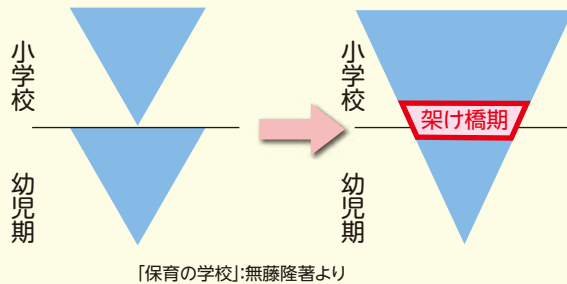
架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、子どもたちの多様性に配慮した上で、全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことを目指すもの。

そのためには

※1 架け橋期とは、義務教育開始前後の5歳児と1年生の2年間のこと。
子どもたちに求められる資質・能力を育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた保育・授業改善が重要である。

幼児教育と小学校教育の連続性・一貫性が重要

小学校の学びは0からのスタートではない



小学校 ～スタートカリキュラム・各教科等の学習を通して～
幼児教育の芽生えを更に伸ばし、主体的に自己を発揮していけるよう、幼児教育の成果を生かした教育活動が求められている。

就学前施設 ※2 ～自発的な遊びを通して～
「主体的・対話的で深い学び」、「個別最適な学び」、「協働的な学び」に向けた資質・能力の芽生えを培っている。

※2 小学校就学前児童施設のこと

架け橋期の「主体的・対話的で深い学び」、「個別最適な学び」、「協働的な学び」の一体的な充実のために、保育・授業の改善を目指す。

架け橋期の保育・教育をどうする？

架け橋期は、0～18歳までを見通したときに、人生の始まりとして大変重要な生涯の学びの基盤となる時期

0歳



架け橋期



18歳



共通の
キーワード

- ・安心感・教師との信頼関係、主体性・自己発揮
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」
- ・非認知能力の育ち・個々の育ちと仲間との協働(協同)
- ・子どもが自ら育つ環境づくり・肯定的な教師の支援

就学前施設 保育改善のポイント！

- ・3要領・指針に添った「自発的な遊び」の重視
- ・小学校との接続を見通した保育の実践
- ・小学校教育の資質・能力の育成につながる多様な体験の保障
- ・遊びの中の学びの芽生えを見取り、伝える視点
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や資質・能力(特に非認知能力)の育ちの見取りと評価

小学校 授業改善のポイント！

- ・スタートカリキュラムの充実→各教科につなげる
- ・幼児教育の手法(環境・活動・関わり)をつなぐ
- ・「環境を通して行う教育」という幼児教育を取り入れた教育実践
- ・幼児期の学びの芽生えをつなぎ、伸ばす視点
- ・資質・能力の育ちの見取りと評価

子どもの豊かな体験を生み出し、主体的・対話的で深い学びの実現のために、幼保小の教育のつながりを意識した遊びや学習、活動に取り組みましょう!!

京都市の方針

◆京都市の幼保小の架け橋プログラムのねらい

- ・架け橋期は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期であると捉える。
- ・子どもに関わる大人が立場の違いを越えて自分ごととして連携・協働し、架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、保育・教育の質的向上を目指す。
- ・各小学校及び就学前施設の子どもや連携・接続の実態、地域や保護者の実態に沿って、架け橋プログラムの推進を図る。

◆全市立小学校での実施

- ・令和7年度から全ての市立小学校で幼保小の架け橋プログラムを実施する。
- ・連携・接続の範囲は、小学校区内を原則とする。
(小学校は自校の校区内に所在する就学前施設との連携・接続に取り組む。)

⇒ 地域ぐるみで進める連携・接続



◆新たなコミュニティの構築

- ・小学校及び連携する就学前施設の管理職や主任、担任等が普段から「子どもたちの保育・教育」について話ができる風通しのよい関係づくりを図る。

◆地域の目指す子ども像の実現に向けた相互理解と保育・教育の質の向上を図る

- ・京都市では、架け橋期のカリキュラムの作成を必須とせず、架け橋期の子どものためにじっくりと話し合い、理念を共有することを最優先させる。
- ・目指す子ども像やそれを実現するための教育活動の在り方の共有などの協議を重視する。
- ・相互理解のための保育・授業参観を伴う合同研修会や互恵性のある子ども同士の交流の充実などにより、保育・教育の質的向上を図る。



地域ぐるみで進める幼保小の連携・接続の京都モデルを目指して

京都市では、幼保小の架け橋プログラムの趣旨や「京都市の方針」に則り、令和7年度から各小学校区の実態に合わせた幼保小の連携・接続の充実を図ります。

まず、小学校と地域の就学前施設が、それぞれの立場を越えて、子どもの育ちを基に話し合うことから始めましょう。幼保小の連携・接続を推進するためには保護者や地域の理解と協力も必要です。保護者や地域とともに取り組んでいきましょう。



フェーズ① 基盤づくり

Point 1 連携・接続する園・学校の決定

小学校の管理職(校長先生)がイニシアティブをとり、校区内の全ての就学前施設や近隣の小学校に連絡し、連携・接続する園を確定しましょう。校区内にある就学前施設とブロックをつくりますが、小学校と就学前施設との距離や入学児童数などにより、柔軟に対応しましょう。

幼保小の管理職同士が、持続的に話し合える体制を構築しましょう。管理職だけでなく担当者同士が気軽に話し合える関係性も構築しましょう。



Q 本校(小学校)は、どこの就学前施設と行えばいいですか？

A 連携・接続の範囲は、小学校区内を原則としています。
小学校は、自校区内に所在する就学前施設と連携・接続を行います。
就学前施設は、自園の所在地を校区に含む小学校(原則1校)と連携・接続を行います。

Q 本校の校区には、就学前施設がないのですが、どうすればいいですか？

A 中学校区内の他の小学校と相談して、連携・接続する対象の就学前施設を調整しても構いません。
また、小中一貫教育の一環で、中学校区内の他の小学校と一緒に中学校区内の就学前施設と連携・接続を推進することも可能です。



[Q&A]

京都市教育委員会HPの「Q&A」や手引きP.5を参考にして連携・接続校園を決定しましょう

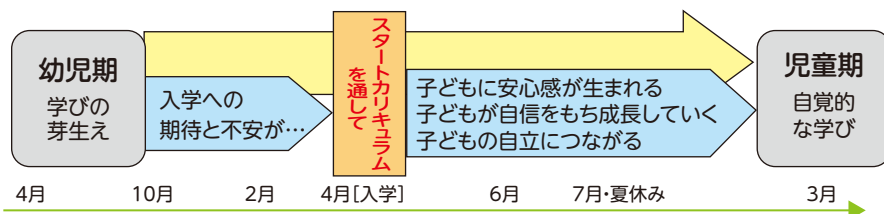
Point 2 1年生の情報共有

入学後、1年生が安心して小学校生活を送るためには、半日入学での子どもの様子や「はぐくみ要録」「就学支援シート」からの情報が重要になります。しかし「はぐくみ要録」「就学支援シート」からは、紙面や保護者からの情報が中心になります。より詳しく子どもを理解するためにも、園との直接的な情報共有を重視しましょう。(手引き P.11)

Point 3 スタートカリキュラムの実施

スタートカリキュラムを実践する基本的な考え方

- ① 一人一人の児童の成長の姿を大事にする
- ② 児童の発達の特性を踏まえて、時間割や学習活動を工夫する
- ③ 生活科を中心に、合科的・関連的な指導の充実を図る
- ④ 安心して自ら学びを広げていけるような学習環境を整える



スタートカリキュラムを長いスパンで考える!... 入学から夏休みまでのカリキュラム

 安心感を持ち、自己発揮できることをねらいとした学習	時期	4月 1週～ 2 週	4月 3週～ 4 週	5月頃	6月頃	7月頃
 合科・関連的な指導による生活科を中心とした学習	重点	安心感	信頼	自己発揮・主体性の発揮		
 教科等を中心とした学習	学習の比重					
						
						
学習を3類型に分類し、単元や学習						

学習を3類型に分類し、単元や学習活動を配列する。

架け橋プログラムの進め方(フェーズ)と具体的取組

フェーズ② 連携・接続の実施

Point 4 架け橋ミーティングの開催・・・話し合う関係づくりの構築

管理職同士での架け橋ミーティング(※)をはじめ担当者同士の会議など、話し合う関係づくりが一番大切です。立場を越えた大人同士のつながりづくりから始めましょう。

架け橋プログラムの持続可能な体制づくりには、時間がかかります。地域の実態に合った方法で取り組んでみましょう。

架け橋ミーティングでは、目指す子ども像や学校・園が大切にしていることなどをざっくばらんに語り合ひましょう。

※各小学校ブロック等における幼保小合同会議のこと。以下「架け橋ミーティング」と記載。(手引き P.10)



Point 5 安心感のもてる半日入学・入学式の実施

半日入学では、積み木や折り紙など環境を設定して、子どもが選択できる活動を用意してみましょう。一人一人の子どもの好きなこと、友達関係、発達の特性等も見えて、学級編成にも役立ちます。

また、入学式当日も、子どもたちは新しい環境で緊張しています。安心感と自己発揮できる環境設定の工夫をしましょう。(手引きP.62、63)

半日入学



積み木や折り紙・自由帳を使い、自分の好きなことに取り組みます

入学式



入学式まで、積み木や遊具で遊びながら待ちます。式後、担任の先生の話を座って聞きます



Point 6 幼児教育をより意識したスタートカリキュラムの工夫

入学後の1年生がより安心感をもち、自己発揮するためには幼保での生活の流れやその発達を生かすことが大切です。幼児教育をより意識したスタートカリキュラムになるよう工夫しましょう。

(手引きP.64～69)



担任の先生と近い距離での読み聞かせ



名刺交換をしよう

ぼくの名前は〇〇です。
好きな食べ物は、からあげ
です。よろしくお願いします。

Point 7 公開保育・公開授業の開催



授業を見る視点を、各ブロックで決めた「目指す子ども像」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」の視点で参観しましょう。

保育参観も、幼児期の子どもの発達や環境の設定、保育者の援助について幼保の先生方の解説があるとわかりやすいです。双方の教育の良さと違いを知ることから始めましょう。(手引きP.11、92～94)

Point 8 5歳児と1年生の交流の実施

子ども同士の交流は、異年齢の子ども同士の人間関係力を育てるよい機会です。生活科の学習と関連付けながら、まずは取り組んでみましょう。(手引きP.14)

フェーズ③ 連携・接続の充実

Point 9 目指す子ども像の具現化に向けた架け橋ミーティング

目指す子ども像の実現に向けた具体的な取組を協議し、前年度の幼保小の取組を改善・充実させるための架け橋ミーティングにしていきましょう。(手引き P.10)



Point 10 保育・教育内容の理解を深める合同研修会の開催

Point 11 公開保育・公開授業の事後研修会を充実



「有識者の講演を聞く」「1年生の教科書を見合いながら、保育と授業のつながりを話し合う研修」など、幼保小の先生方が互いに意見を交わすことができ、保育・教育の内容の理解を深める研修を計画してみましょう。また、互いの保育・授業を参観するだけでなく、その後の話し合いが大切です。付箋などを使いながら積極的に疑問点を出し合うなど、研修方法も工夫しましょう。幼保小の教育の相互理解と教員同士の信頼関係づくりにもつながります。(手引きP.12、92～94)

Point 12 相互理解を深め、接続を意識した保育・授業実践へ

幼児教育が小学校教育の素地になっています。小学校教育の先取りではなく、小学校教育の内容を見通した新たな環境設定や遊び、活動のもち方の視点を得ることが保育の改善につながります。(手引きP.30)
また、小学校では、幼児期の育ちや学びを意識した授業に取り組みましょう。保育参観を通して、環境の設定や、子どもへの肯定的な言葉かけで主体性を引き出す保育者の姿から、「主体的・対話的で深い学び」のある授業改善のヒントが得られるでしょう。(手引きP.56～79)



▲幼稚園でのいろみず遊び



▲カラフルいろみず(図画工作科)

Point 13 交流を互惠性のあるものに

子どもたちが受け身にならないような工夫をすることが大切です。事前に交流の持ち方を幼保小で共に考え、互いのねらいを明確にした互惠性ある交流にしましょう。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに子どもの姿や子ども同士の関わりを振り返りながら、幼児と児童の双方に更に学びのある交流にするために、交流後の合同協議も開催しましょう。(手引きP.14、80～89)

あきと いっしょに(生活科)の交流から



▲幼保小が合同で秋みつけ



▲生活科で学びを深め、いろいろな遊びをつくり出す



▲5歳児を招待しての「あきあそび」

フェーズ④ 持続可能な連携・接続

Point 14 持続可能な連携・接続への改善

幼保小の架け橋プログラムを持続的・発展的な取組にすることが重要です。そのためには、架け橋ミーティングにおいて中長期的な展望をもって話し合ったり、定期開催が継続したりすることが必要です。また、自校園においても全校体制で取り組めるように、他の分掌と協力し合える組織体制の構築に取り組みましょう。

Point 15 主体的・意欲的に学ぶ保育・授業への改善・実施



「いもむし」になりきることで、主体的に取り組めます

幼保小の連携・接続の取組を充実・継続させることが重要になります。幼児教育と小学校教育の連続性と一貫性を意識した保育・授業の実践は、主体的・対話的で深い学びの実現につながります。幼保小がともに架け橋期の保育・授業の改善に取り組むことは、自校園全体の保育・授業改善にもつながります。

(手引きP.12、30、56～61、70～79)

本校では、架け橋プログラムに取り組んで3年になりますが、幼児期の育ちを小学校教育に生かすことで授業の見直しにつながり、子どもたちに主体的・意欲的に学ぶ姿勢が育ってきました。



Point 16 架け橋期のカリキュラムの作成と改善

京都市では、架け橋期のカリキュラムは任意作成としています。

しかし、取組が進み、互いの教育のつながりを構築すると、架け橋期のカリキュラムを作成することは有効な取組です。架け橋期のカリキュラムは、幼保小接続を持続可能にするためのものです。「京都市架け橋期のカリキュラム例」を参考に作成してみましょう。

(手引きP.24～29)

架け橋期のカリキュラムの様式例

〇〇小学校ブロック(5歳児・1年生)

共通の視点		5歳児・1年生											
①目指す子ども像		架け橋期を通じて、どのような子どもを育てるか、育てたい子ども像を検討・決定する											
時 期		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
②発達の具体的な姿とその流れ		5歳児・1年生の発達を踏まえ、各々の発達にふさわしい主体的な遊びや学びへのプロセスをまとめる											
③園で展開される活動/小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構想等		「目指す子ども像」の育成に向けて、園の活動と小学校の授業や活動内容のつながり・在り方を示す											
④指導上の配慮事項	保育者・教師の関わり	保育者や教師の関わりや環境づくりのポイントを示す											
	環境構成・環境づくり												
⑤子どもの交流		互恵性のある交流を通じた学びを深める。幼保小互いの保育・教育に負担になり過ぎないように工夫する											
⑥教職員の交流		架け橋ミーティング以外に公開保育・公開授業等の計画を示し、互いの保育・教育の理解に取り組もう											
⑦家庭・地域との連携		「目指す子ども像」について共有するとともに、連携・接続の意義や取組を発信する方法等を示す											



京都市では、「架け橋期のカリキュラム」の作成を必須としていませんが、各地域で「目指す子ども像」について協議し、それに向けての話し合いや取組を充実させていくと、その足跡を「架け橋期のカリキュラム」として表すことができます。毎年、カリキュラム通りにするためのものではなく、子どもや学校園の実態に合わせて継続できるように改善していきましょう。

架け橋カレンダー

このカレンダーは、一つのモデル案です。これまでの取組を生かしながら、子どもの姿をまんなかにした話し合いから計画をたてましょう。



月	5歳児・1年生	保育者・教師
4月	進級・入学式 	- 架け橋ミーティング① (目指す子ども像の共有) - スタートカリキュラムの実施と授業参観
5月	(図画工作科)すなやつちとなかよし	校園内研修 (スタートカリキュラムや架け橋プログラムの意義など)
6月	(図画工作科)カラフルいろみず	保育、授業公開などを伴う研修会
7月	(生活科)みずであそぼう 夏休み	- 就学支援シートの保護者配布(受取は随時) - 夏季合同研修会 (保育・教育の相互理解など)
8月		
9月		
10月	運動会の参観・交流	保育、授業公開などを伴う研修会
11月	(生活科)あきを見つけよう 就学時健康診断	
12月	(生活科)つくったおもちゃであそぼう 冬休み	
1月	生活発表会等の参観	
2月	半日入学 (生活科)もうすぐみんな2年生	入学前の子どもの情報交換
3月	卒園式・修了式 	架け橋ミーティング③ (振り返りと次年度の展望)



カレンダー内の「(教科)・単元名」は、子ども同士の交流が可能な学習を示しています。上記以外の教科や単元でも可能です。各ブロックの実態に合わせて取り組みましょう。

<問合せ> 京都市教育委員会 学校指導課 幼保小の架け橋コーディネーター
TEL:075-222-3746